

エスニシティ論の再検討 ——北タイ社会に関するエスニシティ論を中心に——

石井香世子

はじめに

本稿では、既存のエスニシティ¹⁾をめぐる理論の検討を通じて、個人によるエスニック・アイデンティティの選択行為にエスニック・カテゴリーをめぐる権力構造が与える影響を検証する。それを踏まえて、個人によるエスニシティに対する選択行為とエスニック・イメージの再構築が当該社会に与える影響を検討する必要性を提示する。

エスニシティに関する議論は、1960年代の旧植民地諸国の独立を受けて発生した人類学における「未開」の変質以降、当時使われていた「部族 (tribe)」概念を検証する形で、人類学の分野で盛んに論じられるようになった。また社会学の分野でも、同じく旧植民地諸国の独立の影響を受けて生じた1960年代の先進諸国内におけるエスニック・マイノリティ²⁾の国民統合への異議申し立てをきっかけとして、「ネイションとは何か」という命題の下、エスニシティに関する議論が頻繁に論じられてきた。

しかし、このエスニシティに関する議論は、既に多くの論者によって論じられてきたにもかかわらず、我々は、未だに複雑なエスニシティ状況を持つ社会に身を置けば、「エスニシティとは何か」という疑問を反芻する。では、これほど多くの論者が議論してきた命題にして、何が欠けているがために、我々は今でもこの命題を掲げるのだろうか。

筆者は、北タイ社会におけるエスニシティ状況と、それに絡みとられ得る個人に関する事例を通じて、既存のエスニシティ理論が説明しきれていない部分は何なのか、どのような説明変数を新たに付け加える可能性があるのかを検討する。具体的には、まず既存の「エスニシティとは何か」を命題とする諸理論の論点を検証し、つぎに北タイ社会を事例とした「エスニシティとは何か」についての議論の流れを

確認する。そして最後に、それら既存の諸理論の論点と、北タイにおけるエスニシティ状況の分析可能性とをつき合わせ、北タイのエスニシティ研究において有効と考えられる、分析枠組みを提示する。

1 人類学・社会学における エスニシティ論の変遷

エスニシティとは、1920年代から1930年代にかけてのアメリカで、後にシカゴ学派と呼ばれるパーク (Robert Parks) らを主な論者とした都市社会学の中で生み出されたエスニック集団という概念を基にしている。しかし、当時、都市社会学の中で用いられていたエスニック集団という概念は、都市研究の一環として、主に同化論を説明原理として用いられたものであり、今日、人類学および社会学の議論の遡上に載せられる際に用いられるエスニシティとは異なる文脈で用いられていた。その後、こうして生まれたエスニックという概念に、今日用いられる意味を付与して用いたのが、モイニハン (Daniel P. Moynihan) やグレイザー (Nathan Glazer) といった1960年代のアメリカの社会学者であった。彼らは、既存の同化論に基づいたエスニック集団研究と自らを区別するため、エスニシティ研究と名乗り、ここにエスニシティという概念が誕生した (Banks 1996: 47-87; 金 2000: 79)。

この頃、アジア・アフリカの旧植民地諸国が独立を遂げると、これを契機として、エスニシティ論が新たな側面を迎える。ギアツ (Clifford Geertz) は、新しく独立した国々が「原初的」単位を無視したネイション (Nation) に基づいているという点を批判する立場から、ネイションが原初的紐帯に基づいたものであるという、原初主義 (Primordialism) の議論を展開した (Geertz 1973)。このギアツのネイション

をめぐる原初論の議論は後に、エスニシティについても適用されるようになり、アイザック (Harold Isaacs) らによって、エスニシティに関する原初的アプローチが試みられていく。

こうした議論に対し、エスニシティは特定の目的遂行のために結びついているものだという指摘をしたのが、グレイザーとモイニハンらであった。彼らは、モイニハン自身によって提示された米国社会の「人種のるつぼ (Melting Pot)」論の限界を、『人種のるつぼを越えて (Toward the Melting Pot)』の中で、さまざまなエスニック集団の利害や対立が維持される様子から指摘した (Glazer & Moynihan 1970)。モイニハンらは、エスニック集団がなくなる理由には、エスニック集団が利益集団であるという側面を持っているためであるとし、先述のようにそれまでシカゴ学派によって用いられていたエスニック集団という概念を同化論的見地から引き離し、エスニシティという言葉を用いた。このときモイニハンらは、エスニシティは何らかの目的のために手段として用いられるものという視点を提出したのである。これが後に道具主義・手段主義 (Instrumentalism) と呼ばれる、エスニシティの結合の根拠を示す概念のひとつとなる。

以上見てきたギアツの原初主義とモイニハンらの道具主義・手段主義と呼ばれる理論は、エスニシティの根源をめぐる議論の中で対置して考えられることが多いが、実はどちらの議論も集合体・集合アイデンティティとしてのエスニシティの存在は、自明の前提として取り扱っているという点では、共通の視座の下で展開されていた (金 2000 : 79)。

一方、社会学の面でも、社会の動きに触発されてネイションをめぐる議論が盛んになり、これに応じてエスニシティをめぐる議論が議論されるようになっていった。

まずアメリカでは、1960年代に国内で隆盛した公民権運動を受け、アメリカ国内のエスニック・マイノリティによる、国民統合の中でのエスニシティによるヒエラルキーの状況に対する申し立てが高まった³⁾。またイギリス、ドイツといったヨーロッパの先進諸国においても、戦後の経済復興期に労働力と

して旧植民地諸国から受け入れた人々が、定住化の傾向を見せたことに伴い、国内のエスニック・マイノリティ集団と化したこれらの人々から、国民統合の状態に対する申し立てが強まった⁴⁾。こうした先進諸国内部のエスニシティ集団の動きを受けて、これらの国々の社会学では、「ネイションとは何か」という命題が、盛んに議論の遡上に載せられるようになっていった。こうした論者の中で代表的なものが、アーネスト・ゲルナー (Ernest Gellner) らの近代主義 (Modernism) と呼ばれる議論と、アントニー・スミス (Anthony Smith) を中心とする歴史主義 (Historicism) と呼ばれるものである。

アントニー・スミスは、近代以降のネイションと近代以前のネイションに類似した現象とを区別し、近代以降のネイションの特殊性を説いた。彼は、それまでに議論されていたネイションをめぐる見解を、ネイションを歴史上いつの時代にも存在する、人間にとって自然で不可欠の要素であるとする「永続主義」的見解と、ネイションを純粋に近代の発展の産物であるとする「近代主義」的見解とに分類した。そしてそれらを踏まえた上で、彼自身は、ナショナリズムが抱えている主題や形態は、古い時代から形成されてきたものであり、近代のナショナリズムを理解するにあたっては、非常に長い時間に基礎づけられた歴史的な土台を分析することが大切であるとした。しかし、彼は同時に近代的なナショナルな単位と、アントニー・スミス自身がエトニーと呼ぶそれ以前の時代の集合的な文化的単位や感情との間に、どのような相違と類似性があるのかを明らかにする必要性を認識している「永続主義」と「近代主義」の中間の立場を取るとした (Smith 1986 : 10-22)。

これに対しゲルナーは、ネイション概念およびエスニシティ概念は、産業社会の落とし子であるとして、産業社会の特殊性とエスニシティ・ネイション概念を結びつけた。彼は、ナショナリズムは人間の社会において文化というものが果たす役割が、農耕社会と産業社会でまったく異なっており、その両者の差が、政治的な領域においてはナショナリズムの出現という形で現れてくるとした (ゲルナー 1992 : 19)。ゲルナーは、アントニー・スミスの分析する

ところの「近代主義者」であり、「(近代以前に) ナショナリズムは潜んでなどいなかった。もともとなかった」とした。また彼は、ナショナリズムとは政治的な単位と文化的な単位とが一致すべきであると語る政治理論であると述べている(ゲルナー 1992: 20)。彼は、産業社会になって革新を繰り返すことによって実現する経済の成長が必然であるという考えが広まると、絶えざる革新のため職業構造が流動的で不安定になると指摘した。こうなると文化は、それまでの社会的地位の指標であることを止め、ひとつのまとまりとしての社会というものの境界を示す指標となる。こうして人々は、命令表示やマニュアルに従うだけの読み書き能力と、社会の政治的経済的な制度に適応していくための外見や振る舞い、その特定の文化のメンバーとして受け入れられる努力をするようになる。ゲルナーは、これが文化と政治は一致すべきだという考え、ナショナリズムであるとしたのである(ゲルナー 1992: 22-26)。

以上見てきたような近代主義と歴史主義も、しばしば対置されて議論の対象となるが、この2つの議論もまた、実体としての「客観的な」集合体としてのネーションを自明の存在と前提にした上で、「エスニシティの結びつきは、いつ、何のためにできたのか」という点を議論しているという点では共通したものであった。

しかし、こうした議論で前提とされている客観的な実在としてのエスニック集団やエスニック・アイデンティティそのものを疑問視し、問題設定を「エスニシティの結びつきは、いつ、何のためにできたのか」から、「そもそもエスニシティの結びつきとはどのようなものか」という点へと移行させたのが、バルト(Fredrik Barth)の、エスニック・バウンダリー論(Boundary Approach)であった。バルトは、エスニシティの結びつきのうち、議論の中で結びついていると仮定される集団と、その集団の外部との境界線(Boundary)と見做される部分に焦点を当て、「エスニシティ分析で重要なのは、“何によって結びついているか”よりもむしろ、“誰がそのメンバーとなるか”である」と言った。バルトは、エスニックな結びつきを主観の産物と捉えることで、エス

ニックな結びつきそのものの実在性を議論する可能性を示したのである(Barth 1969)。しかし、こうしたバルトの議論もまた、エスニシティの生成・普及の側面のみを扱ったものであり、「なぜ個人がそのエスニシティを受け入れるのか」「なぜ創られたそのエスニシティが存続し続けるのか」というエスニシティの定着・再生産の側面までは分析が及んでいなかった。

これに対し、「なぜ、創られたエスニシティを人々は受け入れ、エスニシティが維持されていくのかが問題だ」という点を提起したのが、ホール(Stuart Hall)やビリング(Billing)であった。彼らは、エスニシティという結びつきが続く理由を問題とした。

ここには、エスニシティは流動的・可変的なものであるという視座が持ち込まれており、結びつきは主観的・積極的に活用されることで実在性を強めていくと見做されている。ホールやビリングの研究によって、エスニシティの消費・再生産・抵抗・飼いならし(domestication)といった概念が提出されていった(たとえばBilling 1995; Hall 1996; 松田 1996; 吉野 1997)。しかし、これらの議論では、エスニシティを個人に焦点を当て、個人がどのように消費・再生産・抵抗・飼いならしていくかといった点が問題とされており、エスニシティが、それを消費・再生産・抵抗・飼いならしをしていく個人を通じて、地域社会にどのような影響を与えるかは未だに触れられていないと言えよう。

2 北タイに関するエスニシティ論の視座

では、上記のような議論の流れの中で、本稿での対象事例となる北タイにおけるエスニシティを扱った議論は、北タイのエスニシティをどのように捉えて来たのだろうか。ただし本稿では、既存研究の対象を北タイのエスニシティ状況に影響を与える「タイ系諸族(Tai)」をめぐるエスニシティ論、「タイ国民(Chat Thai)」をめぐるナショナリズム論、「インドシナ山岳少数民族(Chaw Khaw)」をめぐるエスニック・マイノリティ論の三者と限定する。

タイ北部は、歴史を通じてさまざまな人々が波の

ように移民を繰り返す、また現在の中国南部からインドシナ半島全域への移民の経路となった。その結果この地域には、モザイク状に多くの民族が混在することになった (Penth 1996 : 2 ; Wyatt 1984 : 136)。この地域には、先史時代から、先住民族としてラワ (Lawa) やムラブリ (Muraburi, Pi Tong Ruang) と呼ばれる人々の祖先が住んでいたと推定される。その後、6世紀から10世紀の間には、現在のビルマからタイ中部にかけて、モン (Mon)⁵⁾の人々の古代文明が栄える時期が訪れる (Penth 1996 : 28 ; Wyatt 1984 : 42)。この時期、北タイにもモン人がハリプンチャイ王国やドヴァーラヴァーティー帝国を築き、これら高度な文明をもった帝国が繁栄した。しかし13世紀までには、現在の中国南部からタイ系諸族の人々がインドシナ半島中央部にまで徐々に南下し、土着の権力と結びついて外来王として君臨していった。こうして13世紀から19世紀までにかけて、インドシナ半島中央部一帯に築かれたタイ系諸族の王を戴く王国・帝国は、いずれも米穀地帯を後背地とした交易国家であった。このため、各都市国家を構成する人々は、近代的「民族」概念をもってすると非常に多様なものであったと言われている (Penth 1996 : 76 ; Wyatt 1984 : 211)。北タイもまた、チェンマイを首府とする土侯連合であるランナー王国が北タイ各地の都市国家の長である土侯たちを従え、内陸交易国として15世紀を最盛期として繁栄した。この13世紀から20世紀初頭まで、ビルマ等近隣の大国の属国であった時期も長いながら、20世紀初頭まで存続したランナー王国は、徴税記録からも、非常に多様な「民族」構成であったと考えられている。また、ラワ (Lawa)、カレン (Karen)、ルー (Lue)、ユアン (Yuan) などの民族の人々がそれぞれに連合軍を構成してビルマと戦った記録からも、多様な民族がランナー王国を構成していたことがわかる (Penth 1996 : 68 ; Wyatt 1984 : 181)。

また歴史を通じて、現在の中国で漢民族による帝国が成長すると、その周辺地域に居住していた人々が漢民族の圧力に対抗しきれず人口空白地帯へと移住していく民族移動が繰り返されてきた。モン (Hmong) やカレン、タイ (Tai) といった人々もこ

の人口押し出しによって現在のタイ地域へ南下してきた人々であった。この民族押し出しは、近代以降も引き続き生じており、比較的新しい時代に南下してきた人々は、先に南下して平野部の農耕地帯に王権を築いていた人々を避けて、山岳地帯に留まった。こうした人々の間には、山岳地帯という村ごとに分断された地理的条件と、その地理的要因が規定した焼畑移動耕作という産業形態が故に、村落単位を超えた統一政体が生まれることはなかった (Kunstadter 1983)。これらの人々が、20世紀半ば以降、近代西欧的視点から「山岳少数民族 (Chaw Khaw, Hill Tribes)」と呼ばれる人々のイメージの源泉となったのである。

こうした背景の下で現在に至っている北タイをエスニシティの観点から見た場合、今日の北タイは非常に複雑な状況にある社会とすることができる。

北タイには、タイ系諸族の一員とされるカテゴリーだけでも、北タイの主要民族であるユアン人のほかに、タイ系諸族の中で周縁的な位置づけをされているタイ・ルー人、タイ・ヤイ人などが住む。またタイ系諸族の周辺的位置にカテゴライズされている山岳少数民族もあり、この山岳少数民族はモン人、カレン人、アカ人など、さらにいくつものサブカテゴリーに分けられる。これに加えて、上記二者のどちらにもカテゴライズされない (ただし恣意的に山岳少数民族として扱われることもある) 当該地域の先住民とされるラワ人、ムラブリ人や、雲南系中国人 (ホー等の呼称で呼ばれる) などがいる。20世紀初頭まで、首都バンコクがある中部タイの人々からラオ人と呼ばれていたユアン人がタイ系諸族の一員とされたのは、20世紀前半におけるタイの近代国民国家としての体裁作りの過程においてであり (村嶋 1996 : 189)、山岳少数民族という概念もまた、1958年にタイ中央政府によって創り出された官製概念である (古家 1993 : 30)。さらに、タイ・ルーやホーといった、タイ系諸族にも山岳少数民族にも分類しがたい人々を、近代的なエスニック・グループとしてタイ系諸族と山岳少数民族を両極とした軸の中間にカテゴライズしていく作業は、過去40年間の間に人為的に行われてきた作業とってよい (石井 2000 :

650)。

しかしこうした「複雑な」エスニック・グループに分けられる人々の日常生活は、こうしたエスニック・カテゴリーごとに分断されているわけではなく、北タイの山岳地帯に住む人々の多くにとって、日常生活におけるエスニシティは、重層的・選択的なものとなっている。たとえば山岳地帯に住みながらタイ系諸族のものと言われる言語や文化風習を維持する人々もおり、また平地のタイ系諸族と政府が分類する人の中にも、言語学的な研究上は「同系統」の言葉を用いるとされても、日常会話では他のタイ系諸族の人々と意思疎通が不可能なほど異なる言語を話す人々もいる。またこれらの人々の間には多言語話者が常態であり、通婚や養取、移住といった民族間のやりとりも行われている(吉野1984:107)。また近年では、山岳地帯も含む辺境地域から都市部への人口移動が著しい。さらに、バンコクで作られたカリキュラムに従うタイの国民教育の普及にも伴い、北タイにおける社会状況は、近代西欧的なエスニシティ概念をもって見れば、非常に多様で複雑、かつ重層的なものとなっている。

こうした北タイのエスニシティ状況に関係する研究のうち、まず大きな道標となっているのが、エドモンド・リーチ(Edmund R. Leach)によって指摘された、「主観的なエスニック境界と客観的なエスニック境界の乖離」の概念である。リーチは、著書“Political Systems of Highland Burma”(『高地ビルマの政治体系』)の中で、インドシナ半島中央部の山岳地帯一帯に広がって住む山岳少数民族のうち、ビルマに国境内に居住するシャン、カチンの社会を例に、以下のように述べている。

現実にフィールドワークを行う人類学者は、観察する対象を、つねにあたかも全体的均衡の一部分であるかのように見なす。さもなければ記述はほとんど不可能となるが、彼が求めているのは、この均衡が性質上虚構に属するものであると、率直に認めよということにつきる…(中略)…まず最初になすべきは、民族誌的諸事実を、非安定的均衡状態にあると考えられる抽象的全体体系に照ら

して、分析しつくすことであり、ついで現実上の混乱はこの非安定的理念体系の解釈から生ずると想定できる(リーチ1970:322-325)。

また一方で、リーチは、カチンの文化的諸変異に関するフィールド調査から、カチンの文化的諸変異が2つの互いに対立する倫理システム間の妥協の諸形態にほかならぬことを提示し、文化上の区別をこえて拡がるひとつの社会的過程のメカニズムをも、明らかにした。彼は、隣接する社会間に明瞭な経済的・政治的・軍事的相互関係が見いだされるなら、社会学的分析の場を文化的境界を超えて拡げる必要があるとした(リーチ1970:322-333)。

こうしてリーチが境界に着目して提示したエスニック集団という単位そのものの曖昧性を、個人のアイデンティティの点から検証したのが、モアマン(Michael Moerman)である。モアマンは、“Who Are the Lue?”の中で、北タイの事例から得た結論として、以下のように述べた。

エスニシティとは、個人、コミュニティ、および地域において恒久的に続くわけではないアイデンティティとして認識される。…(中略)…あるエスニック集団に属さない人々は、その集団を示すエスニック用語を異なる意味合いで用いる。…(中略)…さらに、そのあるエスニック用語が示すカテゴリーについても、人々は違う範囲を認識している。…(中略)…あるエスニック集団に属する人々もまた、あるエスニック用語を同じ意味合いで用いているとは限らない(Moerman 1965:1222-1223)。

モアマンは、アイデンティティと集団構成員相互の呼称の持つ意味から、エスニシティ・カテゴリーの可変性と曖昧性を描き出しているのである。

こうした、可変性と曖昧性を示した研究を踏まえ、ネイション概念と表裏の関係にあるエスニシティ概念について、エスニシティを付与される側の個人によるエスニシティの創出可能性を示したのがチャールズ・カイズ(Charles F. Keyes)である。カイズは、

タイ人 (Thai) というものは、タイの市民である人々を指すのに用いられ、これに対して「タイ系諸族 (Tai)」という概念は、タイ国内のみでなくラオス、ビルマ、中国南部からベトナム北部、インド北部までにわたる地域に住む、タイ語族の言語を話す人々を指すものとして用いられる、エスニシティを表すという点に着目している。カイズは、この「タイ系諸族 (Tai)」というエスニシティを示す概念が、タイという近代国家構築に伴う、国民としてのアイデンティティ形成のために創りあげられた政治文化の産物である点を指摘する (Keyes 1995 : 136)。しかし同時にカイズは、このエスニシティを示す概念は、近代国家タイ構築の過程において、政治文化的必要性から創られた極めて恣意性の高いものでありながら、これをエスニック・アイデンティティとして利用する人々にとっては、それは常に可変的な動態であり、また主体的に自己イメージとして再構築するものであると指摘している (Keyes 1995 : 151)。つまりカイズは、エスニシティを集団としてのアイデンティティの側面から捉え、「エスニック・アイデンティティとは、外部から強制されたり、恣意的に名付けられるだけではなく、また自分たち自身のイメージとして創りあげる社会的な過程でもある」点を指摘しているのである (Keyes 1995 : 151)。

これまで見てきたような、北タイにおけるエスニシティをめぐる研究は、外部から恣意的に創出されたエスニシティを付与されているかに見える個人による、エスニック・アイデンティティの選択可能性と再構築の可能性を示すことによって、個人のエスニシティに関して、それを付与される側の主体性を発見したものであると言うことができよう。

では、これら既存研究が示してきた分析枠組みを用いて北タイのエスニシティ状況を見たとき、そこに見出される状況および動態変化に対する分析可能性と、既存研究が提示してきた分析枠組みとの関係は、一体どのようなものかということができるのだろうか。

3 北タイにおけるエスニシティの 分析枠組みの再検討

これまで見てきた北タイにおけるエスニシティをめぐる既存研究をまとめると、①集団としてのアイデンティティのあり方を議論の焦点とすることを通じて、②エスニシティの可変性・重層性を指摘しており、③個人によるエスニシティ選択、エスニック・イメージの創出の主体となっている点を指摘しているというところに共通点を見出すことができる。モアマンは、エスニシティを付与される側の人間によるアイデンティティの使い分けを指摘し、カイズもまた、エスニシティを付与される側の人間による自己イメージ創出のためにエスニシティが創出される過程を指摘している。

では、個人によってエスニシティが取捨選択されたり、創出されている状態は、それをもって個人によるエスニシティに対する主体性の発現と見做してよいものなのだろうか。筆者は北タイ都市部に住む「山岳少数民族」というエスニシティにカテゴライズされつつ生きる人々の生活から、ここに疑問を抱いた。確かにエスニック・アイデンティティは恣意的に創られたものであり、個々人が選択的に選んでいる、可変的なものであろう。しかし、そのエスニック・アイデンティティが、確実に個々人の生活や志向、そして社会に与える影響の観点から見て、既存研究の範囲を超えた、分析枠組み・説明変数が必要であると考えに至った。

つまり確かに、あるエスニシティに規定された個人は、エスニシティを選択的に使い分け、そのエスニシティ・イメージを積極的に創出しさえする。では、その個人によるエスニシティ選択の根拠はどのようなものであり、そうした個人の行動は総体として、地域社会・コミュニティ社会に、どのような影響を与えているのだろうか。そこには、個人のエスニシティに対する選択行為を規定するエスニシティをめぐる権力構造や、個人のエスニック・イメージ創出に影響を与えるエスニシティの権力関係が、介在しているのではないだろうか。

筆者は、北タイにおける状況分析のために、エス

ニシティをめぐる個人の選択行為と、エスニシティをめぐる権力構造、その結果地域コミュニティや地域社会に生じる動態に関して、以下のような分析枠組みを提示したい。

(1)個人によるエスニシティの選択に対して、重層的に重なり合うエスニシティをめぐる権力関係が与えている影響との関連性、(2)個人によるエスニシティ選択の過程を時系列的に辿ることによる、エスニシティ選択におけるマイノリティからドミナントへというベクトルの方向性、(3)そうした個人の選択が地域社会（エスニック・グループ社会）に与える影響と、エスニック・グループ社会相互の関係性に与える影響の3つである。

これらの枠組みを通じて北タイ社会を分析することにより、我々はエスニック・マイノリティとしてのエスニシティを付与される個人によるエスニシティ選択・創出と、当該社会におけるエスニック・カテゴリーをめぐる権力構造との関連性を見出すことができるのではないだろうか。つまり、エスニシティを付与される人々のエスニシティに対する主体性と見做されるものは、あくまでマジョリティが規定したエスニシティの間の権力関係の上で行われているものであるという仮説を検証することが可能である。これによって初めて、エスニック・マイノリティに一目付与されているかに見える主体性と、エスニックな権力構造を創出する主体性となり得る、エスニック・マジョリティの主体性との、本質的な違いを検証することが可能なのではないだろうか。

おわりに

以上見てきたように、既存のエスニシティ論では、エスニシティをシンボル・言説として扱う議論の流れにおいても、またアイデンティティや境界の問題として扱う議論の流れにおいても、エスニシティの恣意性や虚構性を指摘するものが主であった。また、シンボルとしてのエスニシティが定着・消費・再生産される過程を扱った議論も登場しているが、それらは、そのエスニシティが想定された社会において、個人がいかにエスニシティを需要・消費・再生産す

るかを議論の範囲としてきた。

また、「タイ人」「北タイ人」「山岳少数民族」、そしてさらにそれぞれのカテゴリーの中に設定されている下位のエスニック・カテゴリー間に複雑な権力構造がある北タイの状況に関しては、特に個人によるエスニシティの選択可能性・可変性、そしてエスニック・イメージの創出が指摘されてきた。

しかしここで、エスニシティの重層的な構造を孕んだ北タイ社会のエスニシティ状況に鑑みて特に注目される点は、個人によるエスニシティの選択・変更・創出に対して影響を与えているエスニック・カテゴリー間の権力関係である。各個人が、それぞれのエスニック・カテゴリーとエスニック・カテゴリー間の権力関係の中で、どのような位置にある（と認識している）のか、そしてその個人による選択の結果、地域社会や地域コミュニティに対してどのような影響を与えているのかという点もまた、これからの研究が期待される分野であろう。これらの点を読み解くことを通じて、特にエスニック・マイノリティと範疇化される人々と社会にとって、エスニシティというものがどのような構造を生み出しているのかという一面を知ることが可能であると言える。

既存研究が指摘してきた、個人によるエスニシティの選択と再生産という過程に影響しているエスニシティの権力構造を読み解くことによって、エスニシティによって規定された社会相互にどのような影響を生み出す構造を生んでいるということができののだろうか。今後、この点を検証する事例研究の蓄積が求められていると言える。

注

1) エスニシティ、エトニー、ネイション、民族、国民といった用語の関係性については多くの論者がそれ自体を取り上げて議論しているところであり（青柳1996；Cohen 1978；佐藤1985）、かつ現在でも論者の間に共通の理解が成立しているとは言い難いと思われる。

これを受けて本稿では、コーエンの「エスニシティとは、成員資格の包括性と排他性の基準に反比例して拡大したり縮小したりする集団に、人々を割り当てるのに用いられる、出自にもとづいた一連の文化的同定物である」（Cohen 1978:

- 168) という設定に基づくエスニシティ概念、また佐藤の「ネーション形成過程をナショナリズムの運動と国家が『象徴権力』を行使して拮抗する政治的過程と捉え、ネーションはいつの時点かで『完成』するものではなく未完のプロセスである」(佐藤1985:123)とする概念に依拠するネーション概念のみを用いて議論するものとする。
- 2) ここでいうマイノリティとは、数の上の少数者ではなく、当該社会における権力の大きさの小ささを表すものとする。
- 3) 1960～1970年代における公民権運動の流れとあいまって、1963年には黒人差別反対ワシントン大行進が行われ、ベトナムの戦線でもこれを支持する黒人兵と白人兵の間で乱闘事件が起きた。こうして、アメリカでは1965年に公民権法が連邦法として制定され、1960年代の末から、黒人問題を「少数者」問題として扱ったアファーマティブ・アクションが展開される社会状況を迎えていた(綾部1986:9; 上村1992:111)。
- 4) 先進工業国への1950年代から1960年代にかけての経済成長期における移民流入は、フランス、ドイツといった他の工業国でも同じような現象が生じていた。たとえばフランスでは、1980年代、総人口5,400万人のうち、約7%に相当する368万人の移民が、1982年時点で国内に存在しているとされた。このうち移民全体の約47.8%はヨーロッパ系(スペイン、ポルトガル、イタリア系)であり、次に多いのは移民全体の42.8%を占めるアフリカ系、アジア系は移民全体の8.0%を占めるとされた。1970年代のフランスの経済成長の過程で、アルジェリア、モロッコ、チュニジアといった旧植民地からの移民が増え、この結果1970年代後半からイスラム系移民が著しく増加した(梶田1986:119)。
- 5) タイ国内に住む人々のうち、平野部に住んできた Mon と山岳地帯を中心に住んできた Hmong とは、全く別の民族である。現地語に比べ発音体系が単純な日本語表記では同じ「モン」となるが、実際には声調や末子韻といった違いによって全く別の単語となるため、これらの人々の間に連続性がある近似的な名前を冠しているわけではない。Mon の人々は6～10世紀に帝国を築いてきた人々であり、Hmong の人々は中国南西部から近世以降になって移動してきた、山岳部を中心に住んできた人々のことを指す。

参考文献

- Anderson, Benedict. 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism, Rev. and Extended*. (白石きや、白石隆訳 1997.『想像の共同体 増補版』NTT 出版)
- 青柳まちこ 1996.『「エスニック」とは』『エスニシティとは何か』新泉社.
- 綾部恒雄 1986.「移民・少数民族・民族集団——少数民族論の展開とエスニシティ論——」『アメリカ研究』20: 1-14.
- Banks, M. 1996. *Ethnicity: Anthropological Construction*. Routledge, New York.
- Barth, Fredrik. 1969. *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Cultural Differences*. Universitets Forlaget, Oslo. (『エスニック集団の境界』青柳まちこ編・監訳 1996.『「エスニック」とは何か』新泉社. pp. 23-72)
- Cohen, Ronald. 1978. “Ethnicity: Problem and Focus in Anthropology.” *Annual Review of Anthropology* 7: 379-403 (『部族からエスニシティへ』青柳まちこ編・監訳 1996.『「エスニック」とは何か』新泉社. pp. 141-188)
- 古家晴美 1993.『「山地民」と『山の民』——北タイ『チャウ・カウ』研究への新たな視座を求めて』『民族学研究』58 (1): 29-48.
- Geertz, Clifford. 1973. “The Integrative Revolution: Primordial Sentiments and Civil Politics in the New States.” Clifford Geertz ed., *The Interpretation of Cultures*. Basic Books, New York. pp. 255-310.
- Gellner, Ernest. 1983. *Nations and Nationalism*. Blackwell Publishers, Oxford. (加藤節監訳 2000.『民族とナショナリズム』岩波書店)
- Glazer, Nathan and Moynihan, Daniel Patrick. 1975. *Ethnicity: Theory and Experience*. Harvard University Press. (阿部斉、飯野正子訳 1986.『人種のつばを越えて: 多民族社会アメリカ』南雲堂)
- Hall, Stuart. 1996. “New ethnicities.” David Morley eds., *Critical Dialogues in Cultural Studies*. Routledge. pp. 441-449.
- Hobsbawm, Eric. and Ranger, Terence. 1984. *The Invention of Tradition*. Cambridge University Press. (前川啓治、梶原景昭訳『創られた伝統』紀伊国屋書店)
- Isaacs, R. Harold. 1975. “Basic Group Identity: the Idols of the Tribe.” Nathan, Glazer and Daniel P. Moynihan eds., *Ethnicity: Theory and Experience*. Harvard University Press. pp. 29-52.
- 石井香世子 2000.「タイにおける『山地民』概念の変遷」『法学政治学論及』46: 631-655.
- 梶田孝道 1986.「移民労働者と社会政策——国家類型と移民問題との関連をめぐって——」『社会保障研究』22 (2): 118-134.
- Keyes, F. Charles. 1995. “Who are the Tai? Reflections on the Invention of Identities.” Lola-Romanucci-Ross and George A. De Vos, eds., *Ethnic Change*. Third Edition, Alta Mira Press. pp. 136-159.
- 金明美 2000.「日本におけるエスニシティ論の再検討: バウンダリー論を中心として」『民族学研究』65 (1): 78-93.
- Kunstadter, Peter. 1983. “Highland Populations in Northern Thailand.” John McKinnon & Wanat Bhuksasri eds., *Highlandres of Thailand*. Oxford University Press.
- Leach, R. Edmund. 1954. *Political Systems of Highland Burma*. Harvard University Press, Cambridge.
- 前山隆 1984.「ブラジル系日本人におけるエスニシティとアイデンティティー: 認知的・政治的現象として」『民族学

- 研究』48(4):444-458.
- 松田素二 1996.『都市を飼いなす』河出書房新社.
- Moerman, Michael. 1965. "Ethnic Identification in a Complex Civilization: Who Are the Lue?" *American Anthropologist* 67 (5): 1215-1230.
- 村嶋栄治 1996.「タイにおける民族共同体と民族問題」『思想』863:187-203.
- Smith, D. Anthony. 1986. *The Ethnic Origins of Nations*. Blackwell Publishers, Oxford. (渠山靖司、高城和義他訳 1999.『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会)
- 佐藤成基 1985.「ネーション・ナショナリズム・エスニシティ——歴史社会学的考察——」『思想』854:103-127.
- 上村英明 1992.『先住民族——「コロンプス」と闘う人びとの歴史と現在』解放出版社.
- 吉野晃 1984.「養取と境界維持」『社会人類学年報』10:105-135.
- 吉野耕作 1997.『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会.